

国際政治の現実と国際政治学の理論

—リベラリズムとリアリズムを中心として—

長岡大学教授 広田 秀樹

—目次—

はじめに

1 国際政治学の2大理論—リベラリズムとリアリズム

2 国際政治学における基幹理論と政策理論

3 国際政治学における理論構築と歴史研究・事実研究の重要性

おわりに

註

主要参考資料

はじめに

グローバリゼーションの時代にあつては、国内の政治経済という閉じた環境の諸条件を考察すれば対応できた時代では想定できなかったほどに、世界の多様な要素が国内に影響を与える。最近の日本の安全保障のスタンスの変化にしても、世界的なパワーバランスの大きな変化が背景にある。その意味で世界全体の状況を大局的に研究する国際政治学という学問分野の重要性は高まっている。

国際政治学にあつてはまず国内政治と国際政治の根本的差異が強調されるのが一般的である。即ち、主権国家内の国内政治にあつては、絶対的な権力・権威機構である政府による統治が可能である。それに対して国際政治では、「世界政府」のような絶対的な権力・権威組織は存在しない。よつて、世界はアナーキーな状態の中で約200の主権国家が多様なネットワークを構築しながらも、基本的には激しい利害調整の中でサバイバル戦を展開せざるをえない。そして、約200の主権国家は、それぞれ独自の歴史的背景・政治的傾向・経済状況・人口・資源状況・文化を有しているがゆえに、国際政治に対するスタンスも大きく異なってくる。例えば、陸続きで侵略の被害にあつた歴史を有する特定大陸内の主権国家は国防の意識が高く、非常事態を考えての食糧自給率を高く維持する傾向にある。歴史上高度な繁栄を誇り独自の成熟文化を構築したが現在は最盛期を過ぎたような国家は国内にあつては福祉国家を指向し対外的には国際協調平和路線を選択する傾向がある。本稿では、複雑多様な世界を包括的に扱う国際政治学の学問体系に存在する国際政治の理論に関して考察したい。

1 国際政治学の2大理論—リベラリズムとリアリズム

国際政治学という学問分野が本格的に構築されるのは、人類史上初めて広範に世界を巻き込む大戦争となつた1914~18年の第1次世界大戦の終了後の時期であつた。世界規模での大戦争を人類は経験し国際社会の安定化を志向する中で国際政治学は誕生するのであつた⁽¹⁾。

第1次世界大戦後にあつて、「どのようにして国際社会の平和を実現すべきか」という問題意識は強く、世界平和を目指すしくみが探究された。その中で、主権国家の利害を調整する国際制度の構築が検討されたのは当然のことであつた。1920年にアメリカのウィルソン大統領の提唱によつて国際連盟 (League of Nations) が設立されたのはその象徴であつた。その他の多様な国際機関の設置や強化、国際法の整備等も急速に進むことになる。このような、

「どのようにして国際社会の平和が実現すべきか」という強い問題意識から現実の世界平和を国際機構・国際法制度・国際的な文化交流や対話といった要素を用いて、あくまで「調整」によって実現しようというのが国際政治学における「リベラリズム」の潮流を形成する。「リベラリズム」の理論的潮流に沿って国際機構の充実、経済的相互依存関係による安定、国際法制度の高度化などが研究されることになる。

リベラリズムとは対照的な理論として形成されるのが国際政治学におけるリアリズムである。第1次世界大戦後に国際連盟という高尚な世界組織を構築し、多様な平和志向の国際的アプローチが拡充されて行ったにもかかわらず、ドイツでのナチスの台頭を契機として、第1次大戦よりはるかに大規模な世界戦争となった第2次世界大戦が勃発して行く波乱の時代背景の中で、調整を中心にして世界平和・安定を実現しようとするリベラリズムへの疑問が発生して行く。リベラリズムを批判する形で国際政治学の理論を構築したのがエドワード＝ハレット＝カー (E・H・カー) であった。1939年にE・H・カーは、*The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction of the Study of International Relations* (『危機の二十年』) を発表し、国際社会の本質は「権力政治」でありその中にあっては国家の「パワー」が最重要な要素であることを忘却してはならないと主張した。

E・H・カーはこの著書の中で、国際政治における「パワー (力・権力)」の果たす役割の大きさについて分析し、「パワー」への認識が欠如した「理想主義」の危険について繰り返し述べている。「第1次大戦後、自由主義の伝統は国際政治の分野に広められていった。英語圏諸国のユートピア的論者たちは、国際連盟の設立こそが国際関係から権力を除去し、陸海軍の時代を論争の時代へと代えていくのだ、と真面目に信じていた。「権力政治」は不健全な旧時代の特徴とみられ、悪口の言葉となった。こうした確信が十年以上も持続しえたのはなぜか。それは強国—その主な利益は現状の維持にあった—がこの時代を通じて事実上権力独占をほしいままにしていた、という事情によるものである⁽²⁾。」「1931年に「権力政治への復帰」と一般にいわれたものは、実際には、現状維持国の権力独占が終わったということの意味していた⁽³⁾。」「権力が政治の本質的要素であることを理解できなかったまことにそのことによって、国際統治の形をつくらうとする試みはこれまですべて挫折してきたし、この問題を議論しようとする試みもまたほとんどすべて混乱に陥った。権力は統治の不可欠の手段である。いかなる現実的な意味においても、統治を国際化するという事は、すなわち権力の国際化を意味する。とはいえ国際政治は、実際には、統治に必要な権力を提供する国家による統治ということになるのである⁽⁴⁾。」「統治の本質的条件である権力が国別に組織されている限り、どんな国際統治も実際には不可能である⁽⁵⁾。」

E・H・カーは「パワー」の内実についても詳細に分析し次のように述べる。「国際分野における政治権力は、ここで議論するためには、次の3つのカテゴリーに分類されよう。すなわち、(a) 軍事力、(b) 経済力、(c) 意見を支配する力、である。しかしわれわれは、これらのカテゴリーが密接に絡み合っていることに気がつくだろう⁽⁶⁾。」

E・H・カーはパワーによる統率がなくても国際社会が安定して平和になると思えるのは錯覚であって、国際政治における権力独占・パワーの集中・パワー関係の安定性があってはじめて国際社会は平和的に安定するというように考える。そして、権力独占・パワーの集中・パワー関係の安定性に大きな変化が生じるときに、国際政治は揺れて急速に不安定化するので賢明な対応が必要になると考える。実際欧州にあって、1920年代は英国とフランスが軍事力で他を圧倒し権力政治での統率があったので欧州での安定・平和が実現していたが、1930年代にパワーバランスに大きな変化が生じるときに国際政治は不安定になった。

国際政治学のリアリズムの潮流は、現実にはナチス・ドイツの欧州支配を軍事力を中心としたパワーで打倒し、第2次世界大戦後に現出した「社会主義 VS 資本主義の体制間闘争」としての冷戦において、ソ連を中心とした社会主義陣営に対峙しなければならなくなったアメリカにおいて、定着し高度化するのであった。

シカゴ大学のハンス＝モーゲンソウが、1948年に *Politics among Nations: the Struggle for Power and Peace* (『国際政治学—力と平和のための闘争』) を出版し、冷戦時代前半の国際政治理論をリードした。モーゲンソウは、「パワー」と同時に「国益 (ナショナルインタレスト)」基準の重要性を示し、さらに「パワーの維持・増大とその誇示」という現実のパワーへの対処等についても考察した。

1979年にケネス＝ウォルツが、*Theory of International Politics* (『国際政治の理論』) を著し、国際社会における国家の「パワー」の認識の必要性に追加して、国際社会全体の「構造」を認識することの重要性を主張した。ウォルツのパワーにプラスして構造の認識を重視する理論は、「ネオリアリズム (構造的リアリズム・ディフェンシブ

アリズム)」という潮流を発生させた。

1981年に誕生したレーガン政権は、米国リアリズムを前面に出した国際政治戦略ともいえる「力による平和」戦略を展開し、米国のパワーの強化・パワーの誇示によって、ソ連社会主義体制を圧倒し世界の構造自体を変容させることに成功し、「冷戦終結⇒ソ連崩壊⇒グローバル資本主義（グローバリゼーション）」と時代を劇的に開いた。1991年末のソ連崩壊以降の1990年代から2000年代初頭の10年間程までの「世紀を跨ぐ約20年間」はアメリカ一國が超大国（世界大国）として世界を軍事・経済で圧倒した「パックスアメリカナ」の時代となった。

2010年代に入り国際政治は大きく変化しはじめている。中国が日本を抜き世界第2位の経済大国になり、その経済力の加速の勢いは、2020年代に米国と並ぶと予測されるほどになった。ソ連崩壊から20年を経たロシアは、ソ連時代から残存維持されている戦略兵器をはじめとする高度な軍事力を背景に、プーチンの強力なリーダーシップによって国力を再生し高め、国際政治において再び米国に対抗するプレゼンスを有するようになってきた。軍事力・経済力・外交力で世界的影響力を有する国家がアメリカだけではなくなくなった時代、「アメリカ極」から「アメリカ・中国・ロシアの3極」へのシフト、「グローバル三国志」とも言える様相に国際政治は変容してきている。

このような変化の中で、シカゴ大学のジョン＝J＝ミアシャイマーが2001年に、*The Tragedy of Great Power Politics*（『大国政治の悲劇』）を発表し、国際政治にあつては既存の覇権大国と新たな覇権指向大国は激突する傾向があるという現実を強く認識させることになった。ミアシャイマーの理論は、新たな覇権指向大国がいかに国際政治の不安定を惹起させそれへの既存覇権大国の対応がいかに困難であるかを包括的かつ緻密に解明し、オフエンシブ・リアリズムと呼ばれている⁷⁾。

2 国際政治学における基幹理論と政策理論

国際政治学における理論とは、「国際政治の多様複雑な現象を少数の変数によってシンプルに説明するもの」・「国際政治の多様複雑な現象の中心部分・基幹部分・骨格を表現するもの」・「主権国家が国際政治に対応するための政策等の形成、国際政治の現実を変革するために必要とされるもの」と考えられる。

理論には国際関係全体の基本法則を説明するものとしての 大局的スケール理論・基幹理論がある。前述のリベラリズム・リアリズムは国際政治学に2大基幹理論と言える。リベラリズムは「国際関係は経済的相互依存・国際調整の制度・人的交流等によって変化が可能」という基本思想を有し、リアリズムは「国際関係はパワーの争い・展開によって変化」という考えを基本に据えている。そして「基幹理論」を源泉にして、多様な国際事象に対応するための「政策設計・制度設計レベルの理論」が形成される。

リベラリズムを源泉として、台頭する地域覇権指向国家との共栄の理論が出てくる。現在の中国の急速な台頭に関する理論の中で、「G2論・チャイナ・パックスサイナアメリカナ」はその代表的な理論である。対テロでの国際法制度強化・経済的不安定要因除去の理論もリベラリズムを起点としている理論である。部分的核実験禁止条約以降の複数の核セキュリティの国際制度の設計もリベラリズムの思想が背景になっている。

リアリズムを源泉として生まれる「政策設計・制度設計レベルの理論」は対照的である。台頭する地域覇権指向国家に対しては早期のパワーによる対応や包囲網の理論が出てくる。現在の中国の急速な台頭への理論の中で、「米軍のアジア太平洋強化戦略・日米同盟強化による対応」などがその具体例である。対テロでの先制攻撃論もリアリズムの発想から形成される理論である。冷戦時代のアメリカの対ソ連の国際政治戦略としてのデタントを含めた勢力均衡理論・相互確証破壊理論（MAD）もリアリズムの発想からのものであり、実際に米国の国際政治戦略を1970年代まで規定した。1980年代のレーガン政権においては、従来の政権より高いレベルのパワー構築を背景にした「均衝突破理論」（「力による平和」理論・超戦略軍事力形成による優位指向の理論）なども形成され、現実に冷戦終結・ソ連崩壊・グローバリゼーションへの世界史的变化の契機を創造する一大要因となった。

3 国際政治学における理論構築と歴史研究・事実研究の重要性

国際政治では予測できない国際事象が発生することがある。例えば、1970年代まで大半の人は、「体制間闘争と

しての冷戦」は、ソ連・米国が社会主義・資本主義の守護者として核兵器をはじめとする強力な軍事力・諜報力・外交力を背景に対峙している限り半永久的に継続する世界体制であると考えた。あるいは、史的唯物理論・階級闘争理論という超長期的歴史理論を確信した者は、超長期的には社会主義への世界的シフトが起きるとも考えた。さらに資本主義・社会主義の「制度的差異の収斂」による体制間闘争の回避を願った者も多かった。ところが現実には「冷戦終結⇒ソ連崩壊⇒グローバル資本主義化」と世界は激変した。世界の人々の中で一体何人がこの大変化を予測したであろうか？

1990年代以降のグローバリゼーションの時代にあつては、資本・人材といった経済発展・経済成長の必要な資源を容易に世界中から調達できるようになった。世界に存在する資本・技術・人材・アイデアなどの多様な「世界資源」を効果的に吸収する開放的な国家戦略をとった国が急速に発展した。対照的に「世界資源」を吸収しようとしない閉鎖的な国家は発展していない。グローバリゼーションの本格始動以降最も適切な対応ができた国家は中国であり、実際中国は飛躍的な経済発展を現出させた。それでも、1990年代の時点では多くの人は、中国経済が日本経済と並ぶのは2030年頃、米国と並ぶのは遙か先であつて予測はつかないと考えた。ところが現実には、中国のGDPは2010年に日本と並び2015年には日本の約2倍の約10兆ドル、米国の約17兆ドルGDPの約60%まで迫った。GDPの年間成長スケールの点で中国が約1兆ドル、米国が約0.3兆ドルという現実を考えれば、2020年代に米中は総体経済力で並ぶと予測される。1990年代あるいは2000年代初頭ですら、世界の人々の中で一体何人が中国のこれだけの大発展を予測したであろうか？

予測できなかった国際事象の発生が国際政治学にあつても常に理論の再検討を迫る契機となつてきた。リベラリズムの風潮が強かつた1920年代からは、「ヒトラー・ドイツの台頭⇒ドイツの連続的対外侵略⇒第2次世界大戦」というシナリオは当初予測できなかった。E・H・カーの『危機の二十年』によるリアリズムの形成も予測できなかった国際事象の発生が切っ掛けになつて発生した理論であつた。

国際政治学にあつて理論は常に歴史・現在の「事実・現実」と往復・対話・検証して変化・発展すべきものである。理論は政策に連動して現実アプローチする「力」となるゆえに、理論の検証・変化・発展は極めて重要である。歴史研究や事実研究は「事実・現実の解明」として重要であつて、そのベースがあつて理論の構築がある。理論は何回でも「出来事の解明」に戻りそのレベルを上げるべきである。「事実・現実の正確な把握」に敏感でない場合に理論構築上の間違いが生じそれは間違つた政策に連動する。

理論は「事実・現実の正確な把握」と常に対話してレベルを上げるべきであつて、特定の理論を絶対視することは危険である。「特定理論の絶対視⇒固定した柔軟性のない政策⇒間違つた方向」を歴史は証明している。特定の「理論」に過度に固執することのリスク・理論が「固定したドグマ (dogma)」になり政策が固定化する危険がある。＜理論⇒ドグマ化⇒政策の固定⇒社会・国家の行き詰まり＞という悪しきパターンである。理論が現実と合致しているかどうか、現実と効果があるかどうか等、理論は恒常的に現実を判断基準にして変化・発展させるべきものである。

元来ほとんど全てが「歴史の一時点でつくられている暫定的なもの」である。にもかかわらず、「歴史の一時点でつくられている暫定的なもの」を過度に信用するリスクが人間の思考傾向として常にある。「歴史の一時点でつくられている暫定的なもの」を大胆に脱却できるリーダーシップ・国家であることがサバイバルでは重要であることを歴史・現実が証明している。中国の鄧小平は1970年代後半に世界の現実を自分の目で確認し冷静に思考し現実から判断して大胆な戦略転換を断行した。古典的なマルクス＝レーニン主義の理論には固執しなかつた。改革開放・先豊論・一国2制度論・対米関係緊密化・白猫黒猫論・生産力主義など意欲的に新型の理論を打ち出した。ゆえに中国は現実の上で発展した。

適切な理論を生み出すためには歴史を学ぶことが極めて重要である。歴史は複雑で多様な出来事を長い時間軸で総体的にみることが教えてくれる。歴史には「長期性・多様性・大局性」がある。歴史学習・歴史研究から物事の「長期性・多様性・大局性」を知ることができる。「長期的な思考・大局的な思考・比較的思考・多様性理解の思考」は歴史を学ぶことから得られる。逆に言えば、歴史を学ばない場合には、短期的思考・狭小な視野・固定的視野から脱却できない。

「冷戦終結⇒ソ連崩壊⇒グローバリゼーションの本格始動」という歴史上の大変化は時間的にはわずか数年の国

際事象の出来事であった。しかし、歴史研究の視点からすれば、「1970年代のデタントから1980年代の新冷戦」、あるいは「第2次大戦後の社会主義・資本主義の体制間闘争の開始から」、さらに「マルクス・レーニン主義を誕生させた1800年代・1900年代初頭まで」遡及する時間的長期性が求められる。また、時代を転換させた要素としては、ゴルバチョフの役割を強調する分析も多いが、歴史研究では、体制思想自体のあり方といった思想哲学の要因、当時の経済状況、人々の生活といった経済の要因、東西の技術力比較といった技術論の視点、チャーリー＝ウィルソンの対アフガニスタン作戦等の諜報戦の要素、ゴルバチョフ以外のレーガン・サッチャー・ワレサ・ヨハネパウロⅡ世・中曽根・コール・ハマー等といった人物の果たした役割などの多様な要素の検証やそれらの大局的視点での考察を要求する。

実際、歴史は多様な原因・変数が絡み合い相互作用し増幅しそれらが統合化され巨大なエネルギーとなったときに大変化が起きることを証明している。「冷戦終結⇒ソ連崩壊⇒グローバル化の本格始動」はその最適な例である。「多様な原因・変数の絡み合い・相互作用・増幅作用⇒巨大なエネルギー化⇒歴史的大変化」という認識も歴史研究から得られる思考方法である。

おわりに

自然科学では普遍性が追求され普遍的理論が存在する。自然科学並みに普遍性を追求する社会科学もある⁽⁹⁾。個々に多様な個性を有し常に変化する人間の総体である社会を対象にした社会科学では過度な普遍性追求への傾斜は危険かもしれない。国際政治にあっても、全ての時代に当てはまるような国際関係の法則・パターン・理論を構築することは不可能であり、永久に通用する理論やどこでも通用可能な理論は存在しない。理論は時代によって、エリアによって多様であると考えべきである。

それでも、国際政治において100%絶対の法則・理論はないが、「確率の高い法則・理論」は存在するし、理論を「暫定的法則・条件付法則・時限的法則」として用いるのであれば大いに価値がある。また、国際政治の分析にあっては、一般理論の適用と多様性の理解の両方が重要である。優秀な医者が必要な一般的な診断をしてからさらに患者一人一人の体質を考慮して分析するように、国際事象の解明にあっては一般理論からの把握と個々の多様性を理解しての分析が重要である。実際、複数の理論を背景にして巧みに国際情勢を分析し複数の政策を効果的かつ柔軟に使いわけた政権や国家はサバイバル戦で生き残り繁栄している。逆に、固定した理論を背景にして政策が硬直化する国家は衰退している。

国際政治研究では基本的に、人間・政策決定者の動機・意図・目的等の「人間の要素」に注目するスタンスと、構造・制度などの「構造の要素」を注視するスタンスがあり、「人間の要素」と「構造の要素」の関係・ウェイト等をどう考えるべきかは永遠のテーマである。実際に、国際政治を変化させ進展させる変数は無数にある。経済力の要因は大きな変数である。なぜなら、経済力は軍事力に転化しそれは国際政治力になるからである。経済力のベースとしての技術・人材育成（教育）の変数も大きい。適切な国家戦略等を形成するシステムとしての民主主義・政治任用による転換・卓越した官僚制等の政治制度の構築と機能の要素も大きい。国家戦略や国際政治戦略に承認を与え支えるものとしての世論やそれを形成するオピニオンリーダーやメディアも重要な変数である。国際政治上での勢力関係・歴史的關係・資源関係・経済的關係・軍事的關係等の国際關係の構造的要素も重要な変数である。そして、「予想外の偶然の出来事」も国際政治を変化させる現実がある。

何れにしても、世界の現実には複雑で多様性と変化の連続に満ちたものであるから、国際政治の理論は恒常的にそのような世界の過去と現在における「事実」と対話・検証を進めながら、適切に構築すべきであり、構築された複数の理論を背景にして、複雑な現実への対応としての複数の政策を形成し、巧みに政策選択を行い政策を実行すべきである。実際、複数の理論からの複数の政策を賢明に使いわけたリーダーシップが卓越している。

最後に、概して国際政治学者は特定の主義に傾斜する場合があるが、研究者の精神の底流で重視する何らかの価値、例えば、人間愛・平和・力・平等・競争・自由・安定・民主・リーダーシップの重要性などといった価値が、自身の理論構築に影響する傾向があるという点も認識する必要がある。

註

- (1) 国際政治学の誕生については、ジョン・J・ミアシャイマー（奥山真司訳）『大国政治の悲劇』、551～552頁。奥山氏は国際政治学のリベラリズム・リアリズムの発生の過程等について明快に解説している。
- (2) E・H・カー（原彬久訳）岩波文庫、2011年、『危機の二十年』205～206頁。
- (3) E・H・カー、前掲、206頁。
- (4) E・H・カー、前掲、212頁。
- (5) E・H・カー、前掲、215頁。
- (6) E・H・カー、前掲、215頁。
- (7) 世界の歴史では新興覇権大国が台頭する過程で、激しい衝突がなかったケースもある。大英帝国の覇権に対する米国の台頭である。このケースでは英国が、対米関係を調整・強化しながら、ゆっくりと段階的に覇権から撤退したから、激しい摩擦・衝突がなかったと考える。英国はこの独自の戦略によって、世界覇権からは撤退したが世界政治での「隠然たるプレゼンス」を保持することになる。
- (8) 「冷戦終結・ソ連崩壊・グローバル化」という現実は、国際政治学等の多様な「理論」の説明力の再検討を迫った。
- (9) 挑戦と応戦（歴史的挑戦の克服⇒新しい文明の誕生）・史的唯物論（無階級社会⇒階級社会・階級闘争⇒無階級社会）等は普遍的な法則性に近いものを探究した学問上の挑戦であると考えられる。
- (10) 民主的平和論（民主主義国家同士では戦争は発生しにくい）、多様な国家統治理論（議院内閣制・大統領制・プロレタリア独裁理論・開発独裁理論）等、多様な政治理論がある。

主要参考資料

ジョン・J・ミアシャイマー（奥山真司訳）『大国政治の悲劇（改訂版）』五月書房、2014年。

E・H・カー（原彬久訳）『危機の二十年』岩波文庫、2011年。

Edward Hallett Carr, *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction of the Study of International Relations*, Macmillan, 1939.

Hans Joachim Morgenthau and Kenneth Thompson, *Politics among Nations*., 6th edition, Mc Graw-Hill, 1985.

Kenneth Neal Waltz, *Theory of International Politics*, Addison-wesley, 1979.

John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, w.w.Norton, 2001.